古今東西、悲恋物語は数多い。福島県の伝説に限っても、例えば「みちのくの信夫もぢずりたれゆえにみだれそめにし我ならなくに」の歌でも有名な、虎女と左大臣源融の『信夫文知摺』（福島市山口）や、清姫と安珍の『安珍経塚』（白河市根田）、一六の娘の身空で、悲嘆のあまり入水した『十六沼』（福島市大笹生）などがある。

だがおそらく、新鶴村に伝わる常姫と富塚伊賀守盛勝の悲恋物語（仮にこの稿のタイトル『千歳桜物語』とする）ほど、史実に近い伝説は珍しいのではあるまいか。この物語は、新鶴村名誉村民山口弥一郎氏が昭和三四年に著わした『奥州会津新鶴村誌』（以下、『村誌』と記述）に詳しいが、それには「もちろん決して私の創作でもなければ、古老が伝え聞き、皆が知っている物語である」とある。

伝承・伝説は、少なからずどの地にあっても風化していく。残念ながら、この『千歳桜物語』も、今の子らにどの程度伝わっているか不安なところなしとはしないようである。そこで村制施行一〇〇周年を機会に、『村誌』を参考にしながら、振り返ってみたいと思う。

■

ミッシング・リンクを結ぶ伝説

まずは史実から確認してみよう。

「南胆部州、大日本国、奥州会津、大沼郡根岸中田村、観音菩薩像者、佐布川村江川長者常俊、一人有姫宮、彼女、文永十癸酉六月十七日、染風疾俄死、故長者、涕涙悲泣、而為菩提、奉鋳観音像、此姫応形、造六尺二分、同脇立為不動、地蔵也、則四間四面建堂、以伸供養、并弥陀、竈焼黒地蔵、伊勢、八幡、春日、仁王、鐘楼倶七堂也、夫及末代、為令再興、奉寄進、田畠地山林共者也、仍善仏、敬白／干時文永十一甲戌八月八日　厳知客誌之」（原文は改行があり、句点はない）。

この観音鋳造の縁起は、再建銘と朱漆で書いてあり、慶安元年（一六四八）の再建の時に記したもので、文永一一年（一二七四）のものではないという。これによると「佐布川村江川長者常俊」が、「文永十一癸酉六月十七日」に一人娘を「染風疾」でにわかに亡くし、その菩提を弔うために、この姫君の姿に似せて観音像を鋳造したとある。

佐布川（さぶかわ）村とは明治二二年（一八八九）の町村合併で田川村となるまで存続していた村名で、現在の会津高田駅の東北、鶴沼川畔にあたる。この縁起からは他に、「一人有姫宮」とあって、それが「常姫」という名であることも、ましてや幼名が「千歳」であることも判明しない。さらには「染風疾俄死」をそのまま解すれば、流行病（染疫）を患って亡くなったのであり、「恋の病」とはどこにも記してはおらず、根岸村の領主富塚盛勝の名も出てこない。しかしこれが歴史にはつきもののミッシング・リンクであり、だからこそ史実を補う伝承・伝説が大切になる。例えば常姫（幼名千歳）などは、まったく根拠なしに勝手に命名されたはずはなく、江川長者が実在の人であった限り、その愛娘名は地域の人々によって伝承されてきたとみる方が自然である。これに、普門山円通院弘安寺の縁起や当時の支配体制、千歳桜の由緒を辿っていけば、まさに紛うかたなく悲恋物語が成立する。

清くうるわしい昔の恋物語

では、伝承されている物語のあらましを『村誌』から抜粋してみよう。

写真右――弘安寺旧観音堂。かつてこの中に弘安寺三尊像を奉祀した厨子（いずれも国重要文化財指定）が安置されていたが、現在は移築されている
（新鶴村民俗資料館提供）

左頁写真右――常姫と富塚伊賀守盛勝が初めて出会ったとされる雀林の法用寺。ここには伊佐須美神社の「薄墨桜」（会津高田町）、一箕町の「石部桜」（会津若松市）、杉薬王寺の「糸桜」（会津坂下町）、磐椅神社の「大鹿桜」（猪苗代町）と共に会津の五桜といわれる「虎の尾桜」（会津高田町指定天然記念物）がある

左頁写真左――三尊像の鋳造場と伝えられる長尾原の弘安寺奥院